

イベント
レポート

第30回「全国きき酒選手権大会」

長野県が個人・団体両部門を完全制覇!
個人の部は中西康裕さん、団体は中西・倉沢さんペアが優勝

第30回目の「全国きき酒選手権大会」が10月22日正午から、東京港区のインターチェンジ東京ベイで開催され、
<個人の部>では、長野県代表の中西康裕さんが、また、
<団体の部>では中西さんと倉沢晃子さんの長野県チームが優勝。並みいる強豪を制して、長野県が「きき酒日本一」完全制覇を果たしました。



個人の部優勝の中西さん



76人の各県代表が真剣勝負



辰馬会長とおちょこくんから祝福を受ける長野県チームの倉沢さん(左)と中西さん

エキサイティングの度を加えるきき酒競技。女性の活躍も

今や日本酒業界の看板イベントのひとつに成長した「全国きき酒選手権大会」。第30回と



プレーオフの模様

いう節目を迎えた今回は、38都道府県の代表76人（男性49人、女性27人）が、「きき酒チャンピオン」の座を賭けて自慢のワザを競い合った結果、最終決着は13名によるプレーオフへと突入する大接戦に。参加選手のきき酒レベルの向上で、回を重ねるごとに競いはますますエキサイティングの度を加えてきているようです。

女性パワーの活躍も目覚ま

しく、女性参加者の数は昨年より4名増と年々その比率は高まる一方。プレーオフ参加者も過半数の7人が女性で、団体の部上位3チームがすべて男女ペアという点は昨年と同じ結果です。

また、今大会では、元プロ野球選手の宮本和知氏（タレント・スポーツコメンテーター）が特別招待選手として参戦。「夏でも熱爛」というほど日本酒好きだけに「久しぶりに緊張しているが、やる気満々。今日は頑



宮本和知氏も参戦



島田さんの取材を受ける選手たち

張ります」と各県きき酒代表選手に混じって大健闘したほか、会場には日本酒スタイリストの島田律子さんをレポーター役に、衛星放送のスポーツ専門チャンネル「J SPORTS」も取材入り。同局では「きき酒=五感のスポーツ」という視点から大会を番組化することになっており、11月21、27日、12月4日の3回にわたって競技の模様を放映する予定（詳しくは <http://www.jsports.co.jp/>）。

★上位入賞者の方々(敬称略)★

【個人の部】

優勝 中西 康裕(長野県)

準優勝 清水 達史(宮城県)

第三位 駒井 裕(滋賀県)

【団体の部】

優勝 長野県(中西 康裕／倉沢 晃子)

準優勝 佐賀県(森 智明／山口むつみ)

第三位 香川県(高石 浩親／狩野 律子)



左から、個人の部準優勝の清水さんと同3位の駒井さん、団体の部準優勝の佐賀県チームと同3位の香川県チーム

「リラックスして健闘を」（佐浦委員長）

競技に先立って行われた開会式では、まず中央会の佐浦需要開発委員長が、「今回は30回という節目の大会。参加者は21歳から75歳まで、年齢も職業も様々だが、いずれもそれぞれの地元で日々きき酒能力を鍛えている方々ばかりだと思う。今日はリラックスして闘いに臨んでほしい。健闘を期待します」と挨拶したのに続いて、昨年団体の部を制した高知県チームの2人（吉川昌治さんと市原奈穂子さん）が優勝杯（角樽）を返還。

次ぎに、同じく昨年準優勝の長野県チームが「日ごろの鍛錬の成果を発揮し、精一杯きき酒することを誓います」と力強く選手宣誓した後、競技委員長の高橋理事から競技方法の説明を受けて、いよいよ闘いの火蓋が切って落とされました。



佐浦委員長



宮本・島田両氏のミニトーク



長野県チームの選手宣誓



高橋理事が競技説明

緊迫、静寂の15分勝負。時間の短さに戸惑う人も

競技では、まず酒造の基礎知識や日本酒の歴史など20題の設問に答える筆記試験（20分）を行った後、4組に分かれて、順次きき酒競技の会場へ。

競技の方法は、これまでどおり7種類の日本酒（純米吟醸、大吟醸、純米、本醸造、生酒、低アル、普通酒）のマッチングで、持ち時間は1グループ約15分。初めに注意事項の説明を聞く間こそ緊張した面持ちだった選手たちは、「スタートしてください」の声が掛かるや、一気に本気モードへ。微かなグラスの音と取材陣のシャッター音だけが響く静寂の中、およそ2時間にわたって緊迫感みなぎる闘いを繰り広げました。



緊迫のまなざし



12:30 筆記試験スタート。難問ぞろい20題に挑戦



競技を終えて控え室に戻った参加者に感想を聞いてみると、「緊張した。難しかった。県の予選は常温の酒だったのに、今回は冷酒。香りが掴めない」「私のきき酒のコツは言葉。“砂っぽい酒”とか、自分で分かる言葉で表現する。でも、今回は言葉が見つけにくかった」「筆記試験は自信があったのに、答え合わせをしてみたら結構間違ってました。ヤバい」といった声が。競技時間の短さに困惑した人も多かったようです。

懇親パーティでひと息。入賞者に賞賛の拍手



酒類総研の木崎理事

競技終了後は、懇親パーティでホッとひと息。辰馬会長の乾杯三唱の発声で全員そろって「日本酒で乾杯！」の杯を上げた後、宮本・島田両氏の楽しいトークなどをまじえて、しばしの歓談を楽しみましたが、正解発表と表彰式の時間になると会場の空気は再びエキサイト。

審査委員長を務めた独立行政法人酒類総合研究所の木崎康造理事の講評に続いて、入賞者が次々に壇上に呼び上げられるたび、会場からは賞賛の拍手と歓声が沸き起こりました。

辰馬会長から賞状、副賞（日本酒と全農提供のお米券など）などを手渡された各部門の入賞者は、マスコミの記念写真に応じたり、随伴の県組合関係者や家族との2ショットに収まったりしながら、満面の笑みで喜びを表現していました。



懇親パーティ風景



辰馬会長の発声で乾杯三唱



宮本・島田両氏のミニトーク

「選手宣誓で緊張解消」（中西さん）。倉沢さんは連續準優勝のツワ者

熾烈な闘いの末に、見事、個人・団体の両部門を制覇した長野県チーム。団体としては昨年の準優勝から鮮やかにランクアップを果たした恰好です。

会社で特許関連の事務を担当するという中西さん（36）は、「仕事が忙しくて寝不足ぎみだったので、コンディションは決して万全ではなかった」と言いながらも、「選手宣誓をやったお陰で緊張がほぐれたのかな。個人・団体のダブル受賞にはただただビックリ。私のきき酒方法は吐き出さない、必ず一口は飲み下すというのが信念。とにかく長野県の強さを証明できてうれしい」と爽やかな笑顔。両部門合わせて日本酒2年分の商品は「必ず半年で飲みります」と頼もしい日本酒消費拡大宣言も。

一方、団体の部で中西さんとペアを組んだ倉沢さん（40）は、昨年も準優勝チームのメンバーで、個人の部では7位に入賞しているツワ者。「全国大会はこれまで3回目。最初のときはまるでダメで、この2年連続で入賞できたのは強いパートナーのお陰」と謙遜しますが、実は「大会前に自宅で練習を重ねた」という努力型。ちなみに倉沢さんのきき酒法も中西さん同様“飲み下し派”で、「少し含んで喉越しと香りを確認する方法が私には合っている」とのことでした。

